第二章　朱雀院の物語　女三の宮との結婚を承諾

［第一段　乳母と兄左中弁との相談］

　*この御後見どもの中に（この姫宮の乳母たちの中でも）、重々しき御乳母の兄（主たる乳母の兄に）、*左中弁なる（左中弁に就いている）、*かの院の親しき人にて（源氏殿に近い血筋の人で）、年ごろ仕うまつるありけり（長年六条院に仕えていた者が居ました）。　*「この御後見ども」は注に＜女三の宮の乳母。内親王には三人の乳母がつく。＞とある。ということは、前段にあった「大人しき御乳母ども召し出でて」の人びとのことで、その中の「重々しき御乳母」についての説明で、「御乳母ども」を「御後見ども」と言い換えたのは、言葉の重複を避けたもので、「左中弁」の説明ではないらしい。「うしろみ」は、直接世話することも言うし、資金援助して生活の面倒を見ることも言うようだが、確かに「左中弁」はどちらにも該当しなさそうだ。それにしても、この「重々しき御乳母」を固有名詞か別の呼び方にすれば、ずっと分かりやすそうだが、それが出来ない窮屈な言い方で語り手も苦労しているようで、お蔭で読者の私も紛らわしさに辟易する。こんな不便な言葉遣いをしてまで守ろうとしたものは何なのだろう。対外交渉をするには客観表現は不可欠だ。対内圧性能の担保は別の方法を工夫すべきで、若しその精神性を客観視出来なかったのだとしたら、当時の識者の狭量に愕然とするし、情熱を持って外国語で学業を修めた甲斐も無いだろうに、私には耐え難い反価値性が感じられて根源的な意欲を削がれる悲しさを覚える。つまり、そんな日本語なら消滅しても構わない気に成る。もしかして、それが今の日本社会の無気力の一因になっていたりもするのだろうか。水利系や物流体系で自給組織の規模や形態が決まるのは今も変わらない。人間は有機的な存在だ。その上で、外交通商で豊かな社会の実現を図るのは、島国内であっても其の自給単位で見れば国際問題であり、同時に中央統治で見れば国内問題なのであって、その問題解決のために単位と組織の共通認識を構築し、いつでも、そして当然に今でも、組織運営のために言語概念の不断の適正化が努力されなければならない。金融を支える根本概念は、実は計画経済である。自給組織主体の社会企画があってこその、生活向上のために有益な諸物資を得るべくする他の組織との交易が意味を持つ。田園都市構想の閉じた概念の発想は日本や英国のような一定規模の島国には適用性が高いように見えても、問題の核心は自給組織の規模と体系という政治単位が市場経済の規模と体系という投資秩序とどう折り合いをつけて豊かな社会を運営するのかという古典命題であり、どのような形態も長い目で見れば一時的な安定状態に過ぎないことは覚悟しなければ成らない。とはいえ、一時的にせよ、安定状態にある事は子育てとは未来投資に於いて決定的な重要な事項であり、その具体的な手法や技術や制度などは人類の貴重な財産で有るには違いない。　*「左中弁」は次席政務書記官。　*「かの院」は朱雀院目線で六条院のことを言う、ようだ。「親し」は＜血筋が近い＞と古語辞典にある。六条院に近い血筋なら、朱雀院にも近いように思うが、母方の桐壺更衣筋の親戚だろうか。桐壺更衣の父は大納言で更衣に兄弟も居たような気がするが、特に出世した者も無く、桐壺帝にそれらを引き立てる力も無かったらしい。であれば、それらの子弟を源氏殿が引き立てた者の内の一人だろうか。藤原氏とも遠そうで、何れ王家筋ではありそうだが、全く不明だ。

　この宮にも*心寄せことにて*さぶらへば（その左中弁がこの姫宮にも関心を特に持っておりまして）、参りたるにあひて（参院して来たので妹である乳母が会って）、物語するついでに（互いの近況の話をする序でに）、　*「心寄せ」は＜心を寄せること、気にすること＞で、要するに、目をつけていて、妹に夜這いの手引きが頼めるかどうか探りに来たワケだ。　*「さぶらふ」は＜仕える、側に侍る＞でもあるが、此処では動作者の姫宮への謙譲を示す女房言葉の丁寧語で、意味は「あり」だろう。

「主上なむ(うへなむ、院の上様が)、しかしか御けしきありて聞こえたまひしを(これこれこうした御意向があって申しあそばしたのを)、かの院に(あちらの院の上様に)、折あらば漏らしきこえさせたまへ(折があれば内々に申し上げてください)。

皇女たちは(みこたちは、内親王たちは)、独りおはします*こそは例のことなれど(独身でいらっしゃることになってしまうのは能く有ることですが)、さまざまにつけて心寄せたてまつり(細々と気遣い申し上げ)、何ごとにつけても(生活全般に)、御後見したまふ人あるは頼もしげなり(御援助申し上げる人が居るのは心強いものです)。　*「こそは例のこと」はどういう言い方か。「れいのこと」は＜普通のこと＞か＜決まりごと＞だろうが、「こそは」はそれ自体の自明の動向を暗意するから＜然るべきものとして当然に＞なのか＜然り乍ら止む無く＞かと思うが、であれば＜当然の決まりごと＞か＜残念ながらよくあること＞になりそうだ。で、内親王が独身で居るのが＜当然の決まりごと＞と言うのは厳しすぎるので、結果として＜残念ながらよくあること＞と解すことにする。

主上をおきたてまつりて(上様を別にし申せば)、また真心に思ひきこえたまふべき人もなければ(他に宮様を心底から御心配申しなさる人もないので)、おのらは(私たちが)、仕うまつるとても(お仕え申すと言っても)、何ばかりの宮仕へにかあらむ(援助資金無しでは、どれ程のお役に立てるものでもありません)。

わが心一つにしもあらで(宮姫を思い申すのは私一人とも限りませんので)、おのづから思ひの他のこともおはしまし(どうしても思いの他のことも御座いまして)、軽々しき聞こえもあらむ時には(他の女房が手引きして小者相手に、浮いた噂でも立とうものなら)、いかさまにかは(どんなにか)、*わづらはしからむ(心外なことでしょう)。　*「わづらはし」は＜面倒だ、気懸かりだ＞ともあるが、忍び通いになってしまったら後は当人同士と両家の問題になるのであって、乳母の出る幕はない。この乳母としては姫自身や院の意向に沿うべく六条院との御成婚を計らいたいと思っているのだろうから、そういう事態は心外なのだろう。しかし、実際には色々な思惑や事情を持った取巻きが居るのであり、そうした諸勢力を取り込んで経営するのが朱雀院の器量に他ならない。ただ、妹にこう切り出されたのでは、左中弁としてはとても手引きの打診を言い出せたものではないだろう。

*御覧ずる世に(上様の御存命中に)、ともかくも(何とか六条院に)、この御こと定まりたらば(宮様の御嫁ぎ先が決まれば)、*仕うまつりよくなむあるべき(お仕えするにも遣り繰りに苦労せずに済むでしょうから)。　*「御覧ずる世」は注に＜主語は朱雀院。＞とある。「見る世」は＜手筈の内に＝計らいで＞という言い方にも見えるが、やはり「世」には＜現世＝生存中＞の響きがあるので、「見る」を＜見届けることが出来る＞という思いを込めた言い方と取って置く。　*「仕うまつり良し」は＜お仕えし易い＞という言い方らしいが、「仕え易い」というのは＜遣り繰りに苦労しない←安定収入がある→安心できる＞ということなのだろう。「なむ」は＜なるだろう＞。「あるべき」は「定まりたらば」を受けた「仕うまつり良し」の理由説明の「べし」で＜～だから＞という文意となり、「にて、煩わしからず」くらいが省辞されているのだろう。

かしこき筋と聞こゆれど(畏れ多い血筋と申されても)、女は(女は男次第なので)、いと宿世定めがたくおはしますものなれば(まことに運勢が不安定でいらっしゃるものなので)、よろづに*嘆かしく(万事が天任せで)、かく*あまたの御中に(こうした多くの女宮の中で)、取り分ききこえさせたまふにつけても(上様が特別扱いなさるにつけても)、人の嫉みあべかめるを(この姫宮

が他の人の妬みを買いかねなさるのを)、いかで*塵も据ゑたてまつらじ(何とか塵一つ付け申すまい、と心掛けています)」　*「嘆かし」は＜嘆かわしい＞とあるが、現代語の「嘆かわしい」は＜至らずに残念だ＞という語感で、より一般的に＜悲しい＞と言っても、此処の文意は見えない。此処の「嘆き」は＜無力・非力の悲しさ＞というより、それでも諦められない思いを遂げる為に＜天運に祈る、懇願する＞で、その形容詞としての＜天任せだ＞だろう。　*「あまたの御中に」は＜多くの姫宮の中で＞という意味らしい。この語だけでは何故その意味になるのかは分からないが、「取り分ききこえさせたまふにつけても」が朱雀院の言動らしいので、文全体を見れば納得できる。が、文全体を見なければ、もし是を語りで聞いていたなら、先ず意味は分からないだろう。いや、雑観して意味が分からないのは此処に限ったことではないが、乳母の長台詞が珍しい所為か、言い回しでも単語の語用でも、この文の解かり難さは目に付く。　*「塵も据ゑたてまつらじ」は注に＜「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寝る常夏の花」（古今集夏、一六七、凡河内躬恒）の言葉による。＞とある。「塵をだに据ゑじとぞ思ふ」は＜塵一つ積もらせないように手入れを欠かさずに心掛けている＞。「咲きしより」「常夏の花」は＜咲いた時から大事にしている＞＜このナデシコの花＞。「妹と我が寝る」は＜妻と私が寝る＞で「とこなつ」の「とこ(床)」に駄洒落るという風流な歌、のようだ。帚木巻二章算段の「大和撫子をば差し置きて、 まづ『塵をだに』など親の心をとる。」という洒落込んだ言い回しの文にも引用された歌だ。

と語らふに(と妹が事情を話すと)、弁(兄の左中弁は)、

「*いかなるべき御ことにかあらむ(どうなりますものやら)。　*「いかならむ」を文意とした。が、「いかなるべき御ことにか」を取り出せば＜何と大変なことか＞という驚きの言葉にも見える。「あらむ」も婉曲と取れば、この文意は＜大変なことになったものですね＞だ。が、一応は「いかならむ」の据わりの良さを取る。

院は(六条院の殿は)、あやしきまで御心長く(不思議なほどに心変わりが無く)、仮にても見そめたまへる人は(一度でも体を重ねなさった相手には)、御心とまりたるをも(気に入った方でも)、またさしも深からざりけるをも(また然程は思い入れなさらなかった方でも)、かたがたにつけて*尋ね取りたまひつつ(その身分に応じて部屋を用意して引き取りなさっては)、あまた集へきこえたまへれど(数多く集めていらっしゃるが)、やむごとなく思したるは(この上なく大事にお思いの方は)、限りありて(決まって)、一方なめれば(紫の上お一人のようなので)、それにことよりて(従って他の御部屋様方は)、かひなげなる住まひしたまふ方々こそは多かめるを(張り合いの無さそうな暮らし方を為さる人が多いようですが)、御宿世ありて(御縁が有って)、もし(もし此方の姫宮様が)、さやうにおはしますやうもあらば(そのように輿入れなさることがあれば)、いみじき人と聞こゆとも(紫の上がいくら、格別の人と申し上げても)、立ち並びておしたちたまふことは(宮様と伍して正妻の座に強いて並び立ちなさることは)、えあらじとこそは推し量らるれど(とてもないだろうとは推し量られますが)、なほ(それでもなお六条殿の紫の上への御思い入れは深いので)、いかがと憚らるることありてなむおぼゆる(どうなるのだろうかとお勧め申しかねる懸念も覚える所です)。　*「尋ね取る」は＜探し出して迎える＞と古語辞典にある。が、「かたがたにつけて」は以前の語用からして＜身分に応じて＞だと思うので、此処の「尋ぬ」は＜捜す＞ではなく＜調べる→分相応に部屋を用意する＞と取る。

さるは(しかし一方では)、『この世の栄え(自分の栄華は)、末の世に過ぎて(末世に過ぎた幸いで)、身に心もとなきことはなきを(身に余るほどだが)、女の筋にてなむ(女性関係では)、人の*もどきをも負ひ(世間の悪評を買い)、わが心にも飽かぬこともある(自分でも満足していない

ところもある)』となむ(とのように)、常にうちうちの*すさびごとにも思しのたまはすなる(殿は常々身内内での愚痴話にその思いを仰っていらっしゃいます)。　*「もどき」は＜真似事＞。噂話を手振り身振りで見て来た事のように演出して、面白おかしく話題にする。転じて、笑いものにする。転じて、悪口を言う。　*「すさびごと」は＜取るに足りない無駄話＞という語感だが、「思い」とあるので＜愚痴＞とする。

げに(確かに)、おのれらが見たてまつるにも(わたしどもがお見受け申すにも)、さなむおはします(そのようで御座います)。かたがたにつけて(身分に応じて)、*御蔭に隠したまへる人(御部屋に置いて殿が守っていらっしゃる人は)、皆*その人ならず*立ち下れる際にはものしたまはねど(皆素性が分からない低い身分の家柄ではいらっしゃらないものの)、限りあるただ人どもにて(高の知れた臣下身分の者たちばかりで)、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる(院として王籍復帰なさった殿の御身分に相応しい高貴さを具えた方はいらっしゃらないようです)。　*「御蔭に隠す(みかげにかくす)」は＜庇って守る＞だろうが、下敷きの有りそうな言い回しだ。が、特に注釈は無い。　*「その人ならず」は＜素性が知れない＞と訳文にある。身上についての文中なので説得力のある言い方だが、この語自体の意味としては＜一人前ではない→立派ではない→不見識な＞という読み方も出来そうに見える。　*「立ち下る」は＜程度が劣る＞と古語辞典にある。

それに(そういうことなので殿が)、同じくは(どうせ他に御部屋様をお迎えなさるならなら)、げにさもおはしまさば(本当にそのように姫宮が六条院にお越しなさるなら)、いかにたぐひたる御あはひならむ(殿とはさぞお似合いのご夫婦にお成りでしょう)」

と語らふを(と話すのを)、

[第二段　乳母、左中弁の意見を朱雀院に言上]

乳母(妹の乳母は)、*またことのついでに(引き続き事の運びとして)、　*「また」は＜それとは別に、その他に＞という意味になる場合もあるが、同じ事柄の継続として＜その上で、更にまた、そして、次に＞を言う言い方でもあり、此処では後者だ。「またの日」は現代語では＜またいつか別の日＞だが、古語では＜翌日＞のことだ。また、「ことのついで」は現代語では＜何かの付け足し＞のような言い方で、古文でも＜たまたまの成り行き＞という使い方はある様な気もするが、此処の「こと」は一般的な＜何かの折＞ではなく、姫の婚儀について＜乳母が左中弁と話したこと＞であり、「ついで」は本義の＜次の手、順序、当然の運び＞だ。「またことのついでに」はそのまま現代語でも使う言い回しだが、そして全体が意味する範疇は同じ事を指してもいそうだが、具体的な内容が古文では根に近く、現代語では葉先を言うようだ。

「しかしかなむ(上様の御意向をこれこれというように)、なにがしの朝臣にほのめかしはべしかば(私の兄に内々に打診しましたところ)、『かの院には(六条院様に於かれては)、かならずうけひき申させたまひてむ(必ず御承諾申しあそばすであろう)、年ごろの御本意かなひて思しぬべきことなるを(王家との縁談という長年の御念願が適ったと御思い為さるに違いないことなので)、こなたの御許しまことにありぬべくは(上様のお許しが本当にあった暁には)、伝へきこえむ(お取次ぎ申します)』となむ申しはべりしを(とのように申しておりましたが)、いかなるべきことにかははべらむ(どう致しましょうか)。

ほどほどにつけて(身分に応じて)、人の際々思しわきまへつつ(御部屋様方の処遇を配慮なさりながら)、ありがたき御心ざまにものしたまふなれど(六条殿は有難い御思い遣りをお示しなさっていらっしゃるようですが)、ただ人だに(そうした臣下身分の女たちでさえ)、また*かかづらひ思ふ人立ち並びたることは(自分の他に互いの立場が気になる御部屋様が横に居るということは)、人の飽かぬことにしはべめるを(誰でも不満に思うことでございますから)、めざましきこともやはべらむ(まして姫宮様に於かれてはそうした中にお入りあそばすと、さぞ心外なこともお有りかと存じられます)。　*「かかづらひ思ふ」は六条院の妻たちが主語で、「人」はそれぞれの妻たちが思う他の妻たち。「かかづらひ」は「かかづらふ」の連用中止名詞で、現代語の「関わり合い」だが、それを「思ふ」ということは＜互いの立場が気になる＞。

御後見望みたまふ人びとは(宮様のお世話をご希望なさる方々は)、あまたものしたまふめり(大勢いらっしゃるようですから)、*よく思し定めてこそよくはべらめ(よくお考え為さるのがよろしいかと存じます)。　*上様に対して乳母にしては生意気な言い方にも見えるが、母君に死に別れた宮様の乳母として、宮様の御事に関しては宮様を第一に思う責任者の立場は許されるのだろう。

限りなき人と聞こゆれど(宮は最上位の人と申しても)、今の世のやうとては(今の御時世では)、皆*ほがらかに(皆はっきりと自分の思いを主張して)、*あるべかしくて(独身を貫いて)、*世の中を御心と過ぐしたまひつべきもおはしますべかめるを(一生を御納得して暮らし終えることがお出来になる人もいらっしゃるようですが)、姫宮は(我が宮様は)、あさましくおぼつかなく(極端に人見知りで)、心もとなくのみ見えさせたまふに(自立なさるのが頼り無いばかりにお見えなさいますので)、さぶらふ人びとは(女房たちは)、仕うまつる限りこそはべらめ(宮が独身でいらしては、十分にお仕えすることが出来ないでしょう)。　*「ほがらか」は＜祝ぐ(ほぐ)ように＞なのだろうか。そうした説明は辞書には無いようだが、言祝ぎの＜明朗な目出度さ、公明さ＞という語感はありそうだ。ただ、此処では文意からして＜明るさ＞ではなく、分を弁えないとまでは言わないが、消極的な生き方の夫唱婦随という形態に捉われない積極的な＜はっきりとした主張＞なのだろう。そうした生き方は昨今では珍しくも無い「女の独身生活」のことかと思うが、当時どころか最近まで、そして本来は恐らくは子育て環境についての雌雄交配で多様性を狙う有機生命体であるところのヒト設計の基本構想からして、経済的且つ倫理的且つ幸福論的に望ましいのは夫婦形態であろうと私は思うが、ともかくもかつては、王家ほどの雲上人でなければ自立した独身女というのは実在しえなかったワケだ。であればこそ、自立心を挫かれて世間の柵に泣き暮らした当時の雲上身分の女読者がこの文にどれほどの羨望を抱いたことだろうかと感慨深く読み味わう。　*「あるべかし」は「あるべし」に同じ、とのように古語辞典に説明がある。ただ、「あるべく」が＜自分が思うように自分が行なう＞のに比べて、「あるべかしく」は＜自分が思うように他人や物事を動かす＞という語感が在るように思う。尤も＜独身を貫く＞のは、自分の意志だけで可能かも知れないが。　*「世の中」を＜夫婦仲＞と取るのは疑問だ。「御心と過ぐしたまひつべき(ご納得して暮らしなさることが出来る)」は宮姫の生き方に付いての乳母の意見だろうから、結婚も独身も含めた姫宮にとっての＜生涯、人生＞と取りたい。その上で、前言の「ほがらかに」を受けて「おはしますべかめる(そういう人もいらっしゃるようだ)」という構文なのだから、是は与謝野訳文の通り＜そのように我を張って一生独身で暮らす人も居るが＞という言い方で、全体の文意としては＜しかし姫は然程に自立心が強くないので、乳母の自分としては姫が独身のままでは心配だ＞と言っている、のだろう。

*大方の御心掟てに従ひきこえて(基本的な御主人の御方針に従い申して)、*賢しき下人もなびきさぶらふこそ(持ち場を心得た使用人たちが役目を仕え申してこそ)、*頼りあることにはべら

め(頼りになる体制かと存じます)。取り立てたる御後見ものしたまはざらむは(有力な保護者がいらっしゃらなくては)、なほ心細きわざになむはべるべき(やはり心配される事かと存じられます)」　*「おほかたのみこころおきて」の主語は姫か院か分かり難い。と悩んだが、此処の文意は乳母の言う一般論らしく、左様に言い換える。　*「さかしきしもびと」は＜利口な使用人＞ではなさそうだ。「さかし」は＜優れている＞や、厭味の＜利口ぶった＞ではなく、役目なりの作法を心得て＜しっかりとその責任を果たす＞ということ、かと思う。　*「頼りあること」は＜頼りになる姿、しっかりした体勢＞。「はべらむ」は「はべる」の婉曲謙遜表現の＜～に違いございません、かと存じます＞。この発言も乳母にしては理屈っぽい口幅ったい言い方にも見えるが、是も管理責任者の弁なのだろう。

と聞こゆ(と院の上様に申し上げます)。

[第三段　朱雀院、内親王の結婚を苦慮]

「*しか思ひたどるによりなむ(私も姫宮をそのように考えているので、六条院に任せたく思っている)。　*「しか」は何を指すのか。「思ひたどる」は＜日頃の言動からその性質に思い及ぶ＞だから、「しか思ひたどる」は＜どうしても宮姫がそう見える＞という言い方に見える。ということは院は、三の宮の資質が自立心に乏しく、とても独身のままでは心許無い、という乳母の意見に同意を示したワケだ。ということは、乳母の勧めるように六条院との結婚を考えている、ということを示してもいるワケだ。「なむ」の後に省略された言葉は「かの人のあたりにこそ触ればはせまほしけれ」(一章六段)あたりなのだろう。左様、補語する。なお、この文は注には＜以下「いとうきことなり」まで、朱雀院の詞。『集成』は、読点で下文に続ける。『完訳』は、句点で文を切り「決断しがたい、を補い読む」。＞とある。私は最初の読み下しで此処を「読点で下文に続け」て読もうとしたが、下の「皇女たちの」の文は一般論なので、「しか思ひたどる」との文意が繋がらず、此処は句点にする。尤も、会話文はその場面とその空気感の中で意味を成しているので省略も多く、確かに難物で、特にこの院の発言会話文での文節は分かり難く、句読点も然り乍ら構成自体も紛らわしい。ただ、この「六条院との結婚が良いと考えている」という主文が先に提示されている、と読むことで、以下の文をその補説と見ることが出来る。

皇女たちの世づきたるありさまは(内親王たちの結婚の現状については)、*うたてあはあはしきやうにもあり(問題があって情けないもののようにも思える)。　*「うたてあはあはしき」の「うたて」は＜あまりにひどく、情けなく＞という副詞ではないようだ。というのも、「やうにもあり」の「も」は類推の係助詞だから、前言に重ねて更に他例を列挙しているワケなので、この「やうにも」が受けているのは「あはあはし」だけだ。この「うたて」は、「うたてあり」の主文に「あはあはしきやうにも」が挿入された文型の一部分であり、読点を付けるべきかも知れない箇所だ。また従って、「やうにもあり」で句点が打てる。即ち、この文は「うたてありてあはあはしきやうにもあり」という一般論を文意とする。ただ、皇女たちの不幸な結婚が具体的にどういうことなのかは示されていないが、例えば紫の上の異母姉である式部卿宮の娘が精神錯乱で右大将家から出戻っていることあたりを、私は想定する。

また高き際といへども(いくら高貴な血筋といっても)、女は男に*見ゆるにつけてこそ(女は結婚した立場になってこそ、その相手の男に)、悔しげなることも(悔しいことも)、めざましき思ひも(怒りも)、おのづからうちまじるわざなめれと(どうしても生まれてくる感情のようだと)、かつは心苦しく思ひ乱るるを(一方では娘の結婚が心苦しく思い悩まれるが)、また(かと言って)、*さるべき人に立ちおくれて(然るべき後見者の親兄弟に先立たれて)、頼む蔭どもに別れぬる後

(頼りに出来る伝手を失った後に)、*心を立てて世の中に過ぐさむことも(自立して独身を通すというのも、不憫だ)。　*「見ゆる」は「見ゆ(結婚する)」の連体形で＜結婚した立場＞。　*「さるべき人に立ちおくれて」は注に＜親などに先立たれることをさす。＞とある。　*「心を立てて世の中に過ぐさむことも」は注に＜『集成』は「自分の意志通り、世の中を生きてゆくといったことも。内親王が独身を通すこという」。『完訳』「自分の意志どおりに。独身を押し通すことを暗にいう」と注す。＞とある。それはそれとして、であれば、論旨はともかく文体としては構文が下に繋がらないので、此処を一文節末と見て句点を打つべきだ。即ちこの文は、今様の書き方にすれば「過ぐさむことも‥。」であり、濁した言葉は「いとほし」あたり。院は宮を思う余りに口籠もった、のだろう。この文は上の「皇女たちの世づきたる有様はうたて淡々しきやうにもあり」という一般論を引いて姫宮の結婚を冷静に否定して考えたいが、どうしても姫宮自身の身上を思えば独身では可哀相だ、という院の思い入れの息遣い、息継ぎの間を感じ取るべきなのだろう。

昔は(過去を振り返れば)、人の心たひらかにて(人の心が穏やかで)、*世に許さるまじきほどのことをば(あってはならない王家への手出しなどは)、思ひ及ばぬものとならひたりけむ(考えもしなかったのが習いだったものだ)。今の世には(昨今では)、*好き好きしく乱りがはしきことも(神職である王家の子女に対しても、情熱のままの夜這いで)、*類に触れて聞こゆめりかし(知己の女房に手引きを頼む者もいるようだ)。　*「世に許さるまじきほどのことをば」は、注と訳文に＜世間に認められないような身分違いの結婚などは＞とあるが、一般的な「身分違い」というよりは＜神職である王家に対する非礼＞のような言い方に聞こえる。ただ、朱雀院自身も藤原腹であり、蘇我氏であろうと、橘氏であろうと、大伴氏であろうと、その他であろうと、腹も勿論だが、王自身も対外圧に備える背景下で全国統治を果たす直前までは一豪族であり、統治した後に島内の統一価値観の象徴として神職を担っているに過ぎないので、足元を見れば一時的な平和の時代を「人の心たひらか」などと言う認識は持てないだろうに、平和を祈って祭礼を奉ってきた自負が院をしてこう言わせているのだろうか。私の印象では、権威を笠に着るのは自らは実体足り得ない庇護下の女の発想で、実権者たる王は責任を果たすべく冷徹な決断をするのであって、全ては自分が＜許すかどうか＞なのであり、「世に許さるまじき」みたいな発想は無い、と思うが、既にこの王朝期に実権は藤原氏にあり、それだけに現下の実権者がもはや軍部という明快な物理制御力組織ですらなく国民投票に拠るところの当選者であり、そういう曖昧な選民に権威付けする今の天皇家以上に、当時の王家はその実権者の圧力を具体的に感じていた、ということかも知れない。　*「好き好きしく乱りがはしきこと」は＜情熱のままに節度を破るようなこと＞みたいな言い方だが、それ自体は当時の一般的な通い婚の申し込みだろうに、それが問題になるのは王家に一般的な仕来たりは無礼に当るという価値観に拠るのだろう。　*「るいにふる」は＜縁故を求める＞と古語辞典にある。詰まりは、貴族の男が＜姫宮との逢引を果たすべく、伝手のある女房に夜這いの手引きを頼む＞ワケだ。「聞こゆめる」は＜(男が女房に)申し込むようだ＞。「かし」は＜～らしい＞で、院が女房などから聞いた話として述べている言い方。

昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし*人の女の(昨日まで高貴な血筋の親の家で大事にされて育ってきた臣下身分の姫が)、今日は*直々しく下れる際の好き者どもに(今日はごく普通の身分の低い家柄の好色な者たちに)名を立ち欺かれて(体を通じた相手と名を噂立てられて)、亡き親の面を伏せ(亡き親の面目を潰し)、影を恥づかしむるたぐひ多く聞こゆる(名誉を汚すというようなことは多く耳にする)。　*「ひとのむすめ」は＜他の家の娘＞ではないようだ。「人の上」は＜他人の事情＞という言い方だが、此処の「人」は上文の「世に許さるまじきほど(畏れ多い王家)」に対比させた「ただうど(臣下身分)」という言い方なのだろう。そう読めば、下の文への論理展開が分かり易い。　*「なほし」は＜歪みの無い平らな様＞の語感で、「直直し」は＜ごく普通の＞。

言ひもてゆけば*皆同じことなり(こうした目下の世情では我が王家であろうと臣下の公卿であろうと、言ってみれば皆同じことで)、*ほどほどにつけて(生まれついての家柄が親に死に別れた後でも)、宿世などいふなることは(変らぬ身分の定めなどというようなことは)、知りがたきわざなれば(分からないことなので)、よろづにうしろめたくなむ(姫を独身のままで私が先立つのは何かと心配でならない)。　*「みな」とは誰のことか。院は、王家の場合と公卿の場合とを引き合いに出していたのだから、それら良家の姫たちの皆、なのだろう。ところで、話題は何だったのか。それは、上文の「心を立てて世の中に過ぐさむことも」であり、この文はその論点整理という位置付けだ。だから、文字上では「昔は」から「多く聞こゆる」までを長い挿入句と見做すことも出来るかも知れない。しかし是は会話文なので、特に接続助詞の省略の所為かと思うが、此処までを一文と成す構文は成立していない。あくまで、その息継ぎを含めた全体の論旨として、そう取るべきなのだろうと解する。院の発言大意としては与謝野訳文に従いたい。また、此処では出家願望よりは、姫を独り身のままにして先立つ生活不安を懸念している問題意識なのだから、「同じことなり」は終止形の「なり」による文末なのではなく、連用中止の「なり」で「うしろめたくなむ」に結ぶ一文と読むべきだ。　*「ほどほどにつけて宿世などいふなること」は＜生家の身分に拠って生涯の身分が定まっているようなこと＞という言い方に見えるが、是は身分社会にあっては秩序維持の主要な制度実体なのであって、是を「知りがたきわざ」などと王家の者が、まして組織秩序頂点の帝の座を務めた者が他人事のように言うのは基本的に有り得ない、ように私には思える。だから是は一般論ではなく、自分の死後に独身で残された三の宮の行く末についての憂慮と読む他はない。いや、院の話の論旨を聞く、と言うべきか。

*すべて(ということは、逆に)、悪しくも善くも(悪い結果でも良い結果でも)、さるべき人の心に許しおきたるままにて世の中を過ぐすは(然るべき保護者の判断で許可した結婚生活のままで人生を過ごすのは)、宿世宿世にて(前世の縁に拠るそれぞれの宿命で)、*後の世に衰へある時も(その保護者の死後に嫁ぎ先が衰退しても)、みづからの過ちにはならず(本人の落ち度にはならない)。　*「すべて」は「統ぶ(すぶ、纏める・締め括る)」の連用形に場面や条件提示の接続助詞「て」が付いたもの。この接続は逆接を意味することもあるので、この「すべて」は＜そうなると逆に＞と取りたい。　*「後の世」は＜死後＞だが、姫の死後ではなく保護者とは即ち＜院の死後＞だ。

*あり経て(また仮に私が、生き永らえたとして)、こよなき幸ひあり(姫の嫁ぎ先がこの上なく栄えて)、めやすきことになる折は(名誉を施した場合は)、かくても悪しからざりけりと見ゆれど(それも悪いことでも無いように思えるが)、なほ(それでもなお)、*たちまちふとうち聞きつけたるほどは(思わず急に耳にする男女関係の場合は)、親に知られず(親に認められず)、*さるべき人も許さぬに(婚約者も許さない内に)、心づからの忍びわざし出でたるなむ(自分ひとりの気持ちだけで不倫を仕出かした訳なので)、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる(女の身の上としては最悪の落ち度と思える仕業なるもので)、直々しきただ人の仲らひにてだに(ごく普通の臣下身分の者の夫婦間に於いてさえ)、あはつけく心づきなきことなり(軽はずみで不都合なことだ)。　*「在り経(ありふ)」は＜月日を送る、生き永らえる＞と古語辞典にある。「在り経て」は上文の「後の世に」に対する言い方で、発言者である＜院が生き永らえて＞。この文は、恋愛結婚の相手が偶々出世して結果的に上首尾を見たら、ということなのか、自分が生きていれば相手の男を引き立てて出世させる、ということなのか、何れにしても相手の男が相応の人物なら、ということではあるのだろうが、当時の事情、まして王家の事情など私には分からないので、院がどういう中身を言っているのかは不明だ。また、「なる折」の説明句として＜仮に＞を補語する。　*「たちまちふとうち聞きつけたるほど」は＜意外で不意に聞きつけた場合＞で、良く有る女房手配の夜這いの始まりのことかと思ったが、それにしては妙に臨場感の有る言い回しで、何か特定の事柄を示しているような

気がしたが、どうやら是は尚侍君と光君の過ちを念頭に置いた物言いらしい。有明事件は光君 20 歳の時のことで今から 20 年近く前のことだから、13 歳の姫宮の乳母が事件当時に何処までの事情を知っていたのかは不明だが、事件自体は当然知っていただろうし、長く仕える内には詳しい事情も聞き知ったことだろう。　*「さるべき人」が＜然るべき保護者＞だとすると、前の「親に知られず」と重複する。が、是を有明事件に準えて考えると、「親」は時の太政大臣かつての右大臣であり、「さるべき人」は尚侍の婚約者であった時の朱雀帝とは院本人だと分かる。院は、姫の性格を余ほど尚侍君に似ていると思ったのか、間男との間違いを案じてはいるようだ。

みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを（自分の思いとかけ離れて厭な男と添わなければ成らない訳ではないが）、思ふ心よりほかに人にも見えず（気に入った相手以外の男とは結婚せず）、宿世のほど定められむなむ（低い身分の者との縁が定められてしまうのは）、いと軽々しく（如何にも軽率で）、身のもてなし（日頃の心構えや）、ありさま推し量らるることなるを（言動からそれとなく分かることなのだが）、あやしくものはかなき心ざまにやと見ゆめる御さまなるを（姫宮は思いの外に頼りない性格に思える御様子なので）、これかれの心にまかせ（其方たちの判断で）、もてなしきこゆな（男の手引きなど計らい申すな）。

さやうなることの世に漏り出でむこと（そうした夜這いの噂が世間に漏れ出ることは）、いと憂きことなり（とても厭なことだ）」

など（などと朱雀院は）、見捨てたてまつりたまはむ後の世を（出家なさった後の姫の身の上を）、うしろめたげに思ひきこえさせたまへれば（心配そうに思い申し聞かせなさったので）、いよいよわづらはしく思ひあへり（いよいよ女房たちは迂闊に手引きも出来ないと、義理が有って断り難い男たちからの姫への言い寄りを気重に思い合いました）。

［第四段　朱雀院、婿候補者を批評］

「*今すこしものをも思ひ知りたまふほどまで*見過ぐさむとこそは（姫がもう少し分別が付くまで世話して暮らそうとは）、年ごろ念じつるを（この何年と心掛けて来ているが）、深き本意も遂げずなりぬべき心地のするに思ひもよほされてなむ（深く願っている出家も果たせず仕舞いになってしまいそうな気がするので判断を急かされているのだ）。　*「今すこし」は＜以下「限りぞあるや」まで、朱雀院の詞。＞と注にある。この文から段替えに校訂してある事を差し引いても、確かに此処から再び朱雀院の発言に成ると言うのは、何か副詞や助詞が不足しているからか、前の文が「思ひあへり」という過去形で語られている所為か、どうも分かり難い。いや何も、それは此処に限ったことではなく、恐らく写本原書などを見ても私などは一行も読めないかと思うが、この渋谷校訂文に於いては注釈の他に、多くの場合は発言文に施された括弧などにも救われるものの、この文は私には厭に意味が分かり難い。訳文を読んでも直ぐには納得できず、何度か見直して理解した。そして、一度理解して読み直すと、然程には難文とも思えない。だというのに、何となく分かり難い印象は残る。恐らく、院の話し方や間がまだ私には呑み込めていない所為なのだろう。といっても、他の女房たちやその他の人びとの発言も、さして良く分かる気もしないが。　*「見過ぐす」は＜見過ごす、見逃す＞という語感だが、此処では「見る（見守る、世話する）」の連用形に「過ぐす（月日を送る）」が付いた言い方なのだろう。

かの六条の大殿は（あの六条殿は）、げに（実際の所）、さりとものの心得て（何しろ何事も心得ていて、周到にことを運びなさるので）、うしろやすき方はこよなかり*なむを（安心できる点

ではこの上ないのだろうな)。　*「なむを」の「を」を接続助詞と見て＜ので＞や＜のだが＞と読み、此処に読点を置いて下に続けても構文が成立して、文意も損なわないかも知れない。しかし私は、与謝野訳文に習って此の「を」を期待を暗意した格助詞の以下省略文として此処に句点をおきたい。つまり、今風に書けば「なむを‥。」だ。この文は朱雀院による六条院の評価ではあるだろうが、朱雀院は滔々と持論を展開しているのではなく、話しながら自分の考えをまとめている、という印象を受ける。

方々にあまたものせらるべき*人びとを知るべきにもあらずかし(姫宮は、各御部屋に多く大殿が囲っていらっしゃるらしい御方々の立場を理解できないだろうし)。とてもかくても(ともかく後の差配は全て)、*人の心からなり(六条殿任せだ)。　*「人びとを知る」の主語は姫宮。敬語省略は一般論的な論調と、そうした内心での問題整理をそのまま口にしたもの、だからなのだろう。だが、是は＜姫宮が六条院の御部屋様方と知り合いに成る＞ことではない。この文は、左中弁の意見を取り次いだ乳母の言葉で指摘された「ほどほどにつけて、人の際々思しわきまへつつ、ありがたき御心ざまにものしたまふなれど、ただ人だに、またかかづらひ思ふ人立ち並びたることは、人の飽かぬことにしはべめるを、めざましきこともやはべらむ」(二章二段)という、六条院の事情を懸念する院の考えであり、姫宮には六条院の人間模様は到底理解出来ないだろう、という当面の見通しだ。　*「人の心からなり」は＜人の気持ち(考え・判断)次第だ＞という言い方だ。が、この「人」を渋谷・与謝野両訳文ともに姫宮＜当人＞としてある。「心」に「御」が付いていないからだろうか。しかし、公的な発言であれば、自分の娘とは言え内親王に対してでも敬語を使うのが身分社会秩序に適う。それに、「心からなり」を成句ないし準成句と見れば、この「人」を六条殿と見做しても差し支えなさそうだ。また、六条院は朱雀院の実弟であり、朱雀院は一代前の主上であってみれば、私的な敬語遣いの省略は有り得る。まして、この場面は王家身内での相談事であり、それも考えを整理する内心文に近いものなので、要点事項の一般論文調の言い方とも取れる。そして何より、「知るべきにもあらず(事情が分かる筈も無い)」という姫の「心からなり(判断次第)」という文意では冗談以外の説得力が無く、今は冗談を言う場合ではない。いや、冗談ではなく「心からなり」と期待して、ほぼ願掛けのように源氏殿を理想的な人物と思い込みたがるところに朱雀院の始末の悪さが有る、のだろう。だから、自分を信じ込ませようとして、更に源氏殿を褒め称えるのが下の文だ。

のどかにおちゐて(六条殿は穏やかに落ち着いていて)、*おほかたの世のためしとも(ひとり姫の処遇のみならず、その一般常識に於いても)、うしろやすき方は並びなくものせらるる人なり(間違いの無い点は他に並ぶ者も無くいらっしゃる人だ)。さらで良ろしかるべき人(これ以上の更に良さそうな姫の結婚相手が)、誰ればかりかはあらむ(他に居るだろうか)。　*「おほかたの世のためしとも」は＜広く世間の規範としても＞という言い方なのだろうか。この「とも」は否定構文で結ばないので＜～だとしても＞という逆接の係助詞ではなく、事例列挙の格助詞の「と」に強調の係助詞「も」が付いたもので、実際に述辞は「うしろやすき方は並びなくものせらるる」とあって、上文にある「ものの心得て、うしろやすき方はこよなかりなむ」と重複している。即ち、上文の「うしろやすし」は＜姫の処遇に対して＞であり、此処の「うしろやすし」は＜全般の良識に於いても＞というミクロとマクロの視点からの検証を試みた、ということなのだろう。尤も、朱雀院は＜試みた＞心算で居たい心理状況にあるだけで、実際には客観的な検証などはしておらず、そうであって欲しいという願望に過ぎない。源氏殿が「おほかたの世のためし」を弁えていたなら、そもそもこんな不倫物語は成立しない。多分、当時の宮廷読者にとっては、此処は笑い所に違いない。いや、朱雀院への嘲笑などではない。娘を思う親ゆえの「心の闇」と、尚侍をめぐる「青春の日々」と、栄誉と圧力の背景で有る「藤原家との確執」と、その全てを呑み込んだ朱雀院という男への悲喜劇に各人なりの現実を噛み締める苦笑いだ。

兵部卿宮(その下の弟の兵部卿宮は)、人柄はめやすしかし(人柄は好ましい)。同じき筋にて(兄弟なので)、異人とわきまへおとしむべきにはあらねど(他人と見て悪く言うべきではないが)、あまりいたくなよびよしめくほどに(余りにも風雅に耽りすぎて)、重き方おくれて(貫禄が無く)、すこし軽びたるおぼえや進みにたらむ(どうも軽々しい感じがしてならない)。なほ(やはり)、さる人はいと頼もしげなくなむある(そうした人はとても頼り無く思われる)。

また、*大納言の朝臣の*家司望むなる(大納言である当院の別当が姫との結婚を望んでいるようだが)、さる方に(その臣下という点では)、ものまめやかなるべきことにはあなれど(大納言はまめに姫を世話し申すのだろうが)、さすがにいかにぞや(そのように家の中で姫が大事にされて居さえすれば良いというものでもないだろう)。さやうにおしなべたる際は(公の場で誉れ有る席に着くためには、そのような並の身分の家では)、なほめざましくなむあるべき(やはり姫の嫁ぎ先としては見劣りするようだ)。　*「大納言」は注に＜系図不詳の人。＞とある。官位相当表では正三位。参議の上に立つ最高位の高官のようだが、人事権や予算執行権が小さかったのかも知れず、雑感だが、大臣は別格として、司の長官などと比べても地位の高さは有りそうだが、時の権力者・実力者という印象は少ない。　*「家司」は「けいし」ではなく「いへづかさ」と読みがある。どちらの読みでも意味は同じで、大辞泉には＜親王家・内親王家・摂関家および三位以上の家に置かれ、家政をつかさどった職。いえづかさ。＞とある。下文に「藤大納言は年ごろ院の別当にて」とあり、院の言う「大納言の朝臣の家司」は＜当院の別当＞という意味らしい。多分、院の予算支出交渉を朝廷に掛け合う役目なのだろう。

*昔も(昔にも)、かうやうなる選びには(こうした婿選びには)、何事も人に異なるおぼえあるに(あらゆる点に於いて抜群の評価の有る者に)、*ことよりてこそありけれ(決着することが多かったものだ)。ただひとへに(ただ単に)、*またなく持ちゐむ方ばかりを(他の妻を持たないで居る点ばかりを)、かしこきことに思ひ定めむは(尊いことだと考え込むのは)、いと飽かず口惜しかるべきわざになむ(地味で冥利の無い生き方というものだ)。　*「昔も」は注に＜『河海抄』は、嵯峨天皇の潔姫の太政大臣良房へ、醍醐天皇の康子内親王の右大臣師輔への降嫁を指摘。＞とある。注の指摘は、姫宮を臣籍に降嫁させるなら、少なくも大臣家でなければならない、と朱雀院が考えていたという意味だろうか。だとしたらこの文は、利用はしても、利用されたくはない、くらいにしか聞こえないが、それは当然の気持ちだろうとは思う。ただ、王家風の所為なのか、それをこういう言い回しにするところが、私にはひどく分かり難い。　*「事寄る」は＜集約する、結局落ち着く＞。　*「またなく持ちゐむ方」は注に＜『集成』は「言外に、多くの妻妾を持とうとも、源氏がいいという気持がある」と注す。＞とある。そうなのかも知れないが、もう少し広義の解釈をしても良いのではないだろうか。即ち、朱雀院は王家の人の人生観として、たとえ内親王であろうと私人として家の中に籠もることを善しとせず、公人として誉れ有る生き方こそが本懐であり、その為には私的な信義も当然大事だが、公的な力量としての社交と其れに伴う浮気の艶やかさが世の中を彩っていること、そこにこそ個を越えた集団の団結と組織による社会力があることを知って、その上で自分なりの役割を生きなければならない、という実感を持っているのだろう。平たく言えば、地味では詰まらない、ということだが、地味な堅実さの重要性だけで派手な社交による豊かさは実現出来ない、というのは奥深い真実だ。ヒトはそのような情報処理を利用するように設計された生命体なのだ。しかし同時に、地味な堅実さを失ったら派手な社交は虚構でしかない、という現実こそが、この物語を含めて多くの戯曲の主題では有るのだろう。力の有る者が投資をしなければ社会は発展しないが、投資は果実を結ばないこともあるので、分を過ぎた投資は破滅を呼びかねない。博打は遊び金でしろ、などと古来から幾ら言ってみても、人はなかなか損切りが出来ないらしい。斯くして永遠の人間模様が展開される。

右衛門督の*下にわぶなるよし(右衛門督が内々に申し入れて来ているようなことを)、尚侍の*ものせられし(尚侍が申していたが)、その人ばかりなむ(その人だけに付いては)、*位など今すこしものめかしきほどになりなば(位などが今少しそれらしいほどになったなら)、などかは(まんざらでもない)、とも思ひ寄りぬべきを(とも思うものの)、まだ年いと若くて(まだ年もとても若くて)、むげに軽びたるほどなり(今のところはどうにも軽すぎる地位だ)。　*「下に侘ぶ」は＜内々に申し入れる＞ということらしい。「侘ぶ」は＜畏れながら申し上げる＞という語感なのだろうか。臣下が王家に対して、という意味だとして、その身分差意識の言葉遣いを普通に話しているような朱雀院の感性に追いて行くのは私には結構しんどい。　*「ものす」は言うの意。朧月夜尚侍、柏木の母方の叔母。右大臣家四の君の妹六の君。と注にある。　*藤原家の長男の「位」については、注に＜柏木、現在、参議兼右衛門督、正四位下相当官。上達部（三位）以上が一人前だという。＞とある。また「年」については＜現在、柏木二十三、四歳。＞とある。

高き心ざし深くて(この者は高貴な家柄の娘を得たいという思いが深くて)、やもめにて過ぐしつつ(今まで独身で過ごして来ていて)、いたくしづまり思ひ上がれるけしき(とても冷静に理想を高く持っているような様子が)、人には抜けて(普通の人より抜き出ていて)、*才などもこともなく(漢学なども難無く修めて)、つひには世のかためとなるべき人なれば(末は朝廷の重鎮と成るべき人なれば)、行く末も頼もしけれど(将来は頼もしいが)、なほまたこのためにと思ひ果てむには(今此処で相手に定めるには)、*限りぞあるや(分不相応だ)」　*「ざえ」は注に＜漢学の才能などが申し分なく備わっている。＞とある。「事も無し」は＜難が無い、優れている＞と古語辞典にある。　*「限りある」は＜限界がある→及ばない→無理だ＞。で、「なほまたこのために」は＜今改めて姫の婿相手に＞だから、それは＜身分不相応で「無理だ」＞というワケだ。

と、よろづに思しわづらひたり(いろいろとお考えなさって悩んでいらっしゃいました)。

かうやうにも思し寄らぬ姉宮たちをば(このようには考え込みなさらない姉宮たちには)、*かけても聞こえ悩ましたまふ人もなし(少しも恋情を寄せて申し込みなさる人も居ません)。あやしく(特別に院が)、うちうちにのたまはする御ささめき言どもの(内々に仰いますこの姫宮の結婚相手の御心配事を漏らしなさる言葉が)、おのづからひろごりて(自然と広がって)、心を尽くす人びと多かりけり(この姫に心を寄せる人々が多かったのです)。　*「かけても」は＜少しも、ほんの少しでも＞。

［第五段　婿候補者たちの動静］

太政大臣も(藤原殿も)、

「この衛門督の(長男の衛門督が)、今までひとりのみありて(今まで独身で居て)、皇女たちならずは得じと思へるを(内親王でなければ妻に取らないと思っているのを)、かかる御定めども出で来たなる折に(こうした朱雀院の婿選びが持ち上がって来た時に)、さやうにもおもむけたてまつりて(その候補に名乗り出で申し上げて)、召し寄せられたらむ時(御取り上げ頂けた時は)、いかばかりわがためにも面目ありてうれしからむ(どれほど親の面目が施せて嬉しいことだろう)」

と、思しのたまひて(思い仰って)、尚侍の君には(朱雀院の最愛の女である尚侍の君には)、かの姉北の方して(その姉である自分の妻にして衛門督の母から)、伝へ申したまふなりけり(その

旨を伝え申しなさっていました)。よろづ限りなき言の葉を尽くして奏せさせ(尚侍には院にあらゆる言葉を尽くして本人の優れた点や藤原家としても礼を尽くして姫宮をお迎え申す約束事などをお話し申して衛門督の推挙を奏上させて)、御けしき賜はらせたまふ(御内意を頂けるよう働きかけなさいます)。

兵部卿宮は、*左大将の北の方を*聞こえ外したまひて(左大将の奥方となった女を六条院から貰い受け損ねなさって)、*聞きたまふらむところもあり(この度の朱雀院の婿選びをお耳にされたという所なのであり)、かたほならむことはと(身分違いの臣下筋との結婚は出来ないと)、選り過ぐしたまふに(嫁を決め兼ねて日々を過ごしていらっしゃったので)、いかがは御心の動かざらむ(どうしてこの話に御心の動かない筈がありましょう)。限りなく思し焦られたり(非常に胸を焦がしなさいました)。　*「さだいしゃう」は前の右大将のことらしい。左が筆頭なのだろう。注には「左大将の北の方」は＜鬚黒大将の北の方、すなわち玉鬘。＞とある。　*「聞こえ外す」は＜(結婚の)申し入れが適わない→嫁に貰い損ねる＞。　*「聞きたまふらむところもあり」の主語は兵部卿宮なのだろう。が、渋谷訳文は此処の解釈を避けているようだ。与謝野訳文では是を「その左大将夫婦に対してもりっぱでない結婚はできないようにお思いになって」と解釈してある。ということは、与謝野文は「聞きたまふらむ」を兵部卿宮が左大将の夫婦仲を＜お聞きなさってか＞と取り、「ところもあり」を＜其れを気にして＞と読んでいるのだろう。是は上の「聞こえ外したまひて」の「て」を＜そして＞のような連続描写の接続助詞と見ているからだと思うが、この「て」は＜という状態で＞という事情説明での接続助詞かと私は思う。だから、そういう＜失意の状態に於いて＞「聞きたまふらむ(お耳にされたであろう)」という意味だから、何を「聞きたまふらむ」かと言えば＜朱雀院の三の宮の婿選び＞なのだろう。

*藤大納言は(とうだいなごんは)、年ごろ院の別当にて(ここ何年と院の別当にあって)、親しく仕うまつりてさぶらひ馴れにたるを(親しく仕えて勤め慣れていたので)、御山籠もりしたまひなむ後(院が出家なさった後に)、寄り所なく心細かるべきに(潰しが利かない心細さに)、この宮の御後見にことよせて(この姫宮の御世話という言い方で)、*顧みさせたまふべく(引き続き当院での公務員としての御役目を頂けるように)、御けしき切に*賜はりたまふなるべし(院のご内意を切望なさっているのだろう)。　*「藤大納言は年ごろ院の別当にて」は注に＜前に「大納言の朝臣の家司望むなる」とあった人。朱雀院の院庁の長官。＞とある。朱雀院が「家司」と呼んでいたのが、「院の別当」として任命されていた藤氏の大納言だったことが分かる文、かと思う。　*「かへりみさせたまふ」は注に＜「させ」尊敬の助動詞。「たまふ」尊敬の補助動詞。主語は朱雀院。最高敬語。＞とある。　*「賜はりたまふなるべし」は注に＜主語は藤大納言。「なる」断定の助動詞「べし」推量の助動詞、語り手の断定と推量。＞とある。

[第六段　夕霧の心中]

*権中納言も(権中納言となった源氏君も)、かかることどもを聞きたまふに(こうした事情をお聞きなさるにつけても)、　*「ごんのちゅうなごん」は注に＜夕霧。＞とある。この秋の宣旨で、源氏殿が準太上天皇に遇されたのに伴う人事で「内大臣上がりたまひて、宰相中将、中納言になりたまひぬ」(藤裏葉巻三章一段)とあった。18歳の源氏君にして、ついに同年齢で見た親父殿(源氏殿は18歳当時は宰相中将)を越えた出世を見た。尤も、源氏殿は当時の地位こそは納言に及ばなかったが、もともと帝の御子という特権もあって名目の職掌などは本質的には然程は意味も無いのであり、12歳で藤原左家の葵の上(4歳年上)と結ばれた時にして既に独立した居家として二条院を帝から賜わっており、身分も桐壺帝の朱雀院行幸での演舞を愛でられて19歳の正三位に遇されており、実質での生活感としては、この源氏君を遥かに凌いでいた、とは思う。源氏君は、やっと今にして、三条邸に

独立した居宅を構えたに過ぎない。なお、「権官」は＜特命任官＞で、「特命」は＜特別な権限を与えられた場合＞か＜実権のない名誉職名＞かで、双方の中身は全く異なるが、同じ名称で個別の事情を知る当時の人々はその微妙な距離感を共同体意識の共有として了解するという、客観性は担保されないものの其れなりの意味付けが付与される、組織上の概念規定を少なからず故意に避けた間に合わせの命名で、便利だが危険な語用だ。

「*人伝てにもあらず（人伝ではなく院から直に）、さばかりおもむけさせたまへりし御けしきを見たてまつりてしかば（そのような意向をお見せになられた御言動を拝し奉ったので）、*おのづから*便りにつけて*漏らし（もし私が人を介して好意を漏らし）、聞こし召さることもあらば（それを朱雀院がお聞きなさることでもあれば）、よももて離れてはあらじかし（決して遠ざけて考え為さることはないだろう）」　*「人伝てにもあらず」は当巻一章四段の、中納言が朱雀院と面会した際に院から言われた「太政大臣のわたりに、今は住みつかれにたりとな。年ごろ心得ぬさまに聞きしが、いとほしかりしを、耳やすきものから、さすがにねたく思ふことこそあれ」のこと、なのだろう。　*「おのづから」は普通は＜自然に、自ずと＞だが、此処では「聞こし召さることもあらば」と「あらば（～だとしたら）」の仮定文で使われているので、この「おのづから」は＜もしも、仮に＞の意味であり、上の「見たてまつりてしかば」という状況下で＜その上で＞という構文が内包された言い方、なのだろう。であれば、この文の内心文括弧は「よももて離れてはあらじかし」だけか、さもなければ不要にも見えるが、「人伝てにもあらず」からの括弧でも文意を損ねず、むしろ分かり易いので、この校訂に従う。　*「たよりにつく」は＜縁を頼る、機会を見る＞あたりだろうが、「漏らす」とあるので＜人を介してそれとなく＞なのだろう。　*「漏らし」の主体は夕霧、「聞こしめす」の主体は朱雀院。と注にある。

と、心ときめきも*しつべけれど（胸を躍らせて当然なのだが）、*女君の今はとうちとけて頼みたまへるを（妻の藤原姫が今漸くと安心して自分を頼りにしていらっしゃるのを）、年ごろ（長年）、つらきにもことつけ*つべかりしほどだに（藤原殿の冷たい仕打ちの所為に出来た時でさえ）、他ざまの心もなくて過ぐしてしを（他に本気で結婚相手も考えずに過ごしてきたのを）、あやにくに（筋を違えて）、今さらに立ち返り（今さらに元に戻して）、　*「しつべし」は＜（そういうことが）あって当然＞という語感。この「べし」は単純推量や可能・妥当の予測というよりも、ある事柄でもたらされる他の必然の帰結事象に視点展開することで場面転換する話法、かと思う。また、「したまひつ」などの敬語表現に成っていないことについては、「人伝てにもあらず」の注に＜以下の文章は、地の文と夕霧の心中とが渾然一体化した表現。＞とあって、確かに客観的な表現に欠けるような気はする。ただ、中納言というか源氏君については、以前から敬語省略は度々あった。中納言になっても、まだ幾らか子供扱いなのだろうか。　*「女君の今はと」からを渋谷校訂文では内心文括弧としてあるが、源氏君自身が妻を「女君」と呼称するのは、特に内心文では有り得ない気がして、従えない。是は地文だ。ただ確かに、この文では文意を取るのに内心文括弧は必要かとは思われ、それは「にはかに物をや」から「苦しくこそはあらめ」としたい。　*「つべかりし」の「べし」は＜可能性＞。

「にはかに物をや思はせきこえむ（急に他の女のことで妻に心配を掛け申すことなど出来ようか）。なのめならずやむごとなき方にかかづらひなば（姫宮のような並々ならぬ高貴な方に関係を持てば）、何ごとも思ふままならで（何事も自由にならず）、*左右に安からずは（どちらにも気を遣わなければならないのは）、わが身も苦しくこそはあらめ（自分にとっても辛いことだ）」　*「ひだりみぎ」は＜女三の宮と雲居雁をさす。＞と注にある。

など（などと中納言は）、もとより好き好きしからぬ心なれば（もともと色事に熱中しない性格なので）、思ひしづめつつうち出でねど（自重して申し出なかったが）、さすがに他ざまに定まり

果てたまはむも(そのまま姫宮が他の男との縁組に落ち着きなさろうというのも)、いかにぞやおぼえて(興味を覚えて)、耳はとまりけり(動向は気にしていました)。

[第七段　朱雀院、使者を源氏のもとに遣わす]

*春宮にも(皇太子に於かれても)、かかることども聞こし召して(この姉宮の婿選びの事柄をお聞きあそばして)、　*東宮、十三歳。と注にある。

「さし当たりたるただ今のことよりも(内親王の結婚はこの三の宮ひとりの事情よりも)、後の世の例ともなるべき*ことなるを(前例として後世の手本に成るようなものであるべきだ。)、よく思し召しめぐらすべきことなり。　*「ことなるを、よく思し召しめぐらすべきことなり」について、注は＜明融臨模本は片仮名で補入。大島本と御物本は「事なり」とある。一方で横山本、陽明文庫本、池田本、国冬本等他の青表紙本や河内本、別本の保坂本、阿里莫本にもこの句がある。＞と指摘している。「よく思し召しめぐらすべきことなり」は＜よく全体をお考え回すべきことなのです＞という敬語遣いだから自問文ではない。となると、是は13歳の皇太子が42歳の父院に＜意見した＞のか、或いは＜良くお考え抜き成されたことだと感心した＞文なのか、何れ父院への評価ということになる。いくら是が「わざとの御消息とはあらねど、御けしきありける」ことだとしても、事、家庭内のことにあって家長たる父の判断を批評するなど皇太子とは言え僭越に過ぎる。というか、姉宮の婚儀は余程の不始末でも無い限り皇太子の立場に影響は無く、皇太子は身内のことで祝儀に関与する事柄とは言え、相当に客観的にこの話を聞いた筈だ。その話を聞いた反応である東宮の「御けしきありける」は、ほとんど東宮の内心文に近いつぶやき程度のものを、この件の事情説明の使者を務めた院の側近が忖度して、帰院後の報告として朱雀院に言上申し上げたのだろう。であれば、元々が意見などはあろう筈がなく、この大人の事情を漏れ聞いた反応としての東宮の一般的な感想なのであり、父院にしても、東宮の意見が知りたいのではなく、東宮の反応に其の成長ぶりを確かめるという場面なのだろう。なので、私はこの「よく思し召しめぐらすべきことなり」の句は無用として、「後の世の例ともなるべきことなり」と読みたい。ただ、是は「大島本」に従うということに成るのだろうか、何故このような混乱があるのか、この「さし当たりたる」という分かり難い言い出しからしても、むしろこの前文に何らかの脱稿が疑われて気持ち悪い。

人柄よろしとても(人物や家柄が良くても)、ただ人は限りあるを(臣下では婿殿だけが王族の権威を利用できるだけで繁栄は藤氏本人の実力による可能性頼みであり、子を設けても其の子は更に臣下身分に過ぎないので安泰は実力次第であり)、なほ(やはり)、しか思し立つことならば(姉宮は独身を通さずに、そのように婚儀をすべしと父院がお考え為さるなら)、かの六条院にこそ(あの叔父院の六条殿にこそ)、親ざまに譲りきこえさせたまはめ(親身のお世話をお任せ申しなさるべきでしょう)」

となむ(とのように)、わざとの御消息とはあらねど(事改めての御文ではないが)、御けしきありけるを(そうした感想を洩らしなさるのを)、待ち聞かせたまひても(朱雀院は東宮に事情を伝え申しさせなさる為に遣わしなさった側近から、帰りを待って東宮の反応を報告致し申すのをお聞きなさったことからも)、

「げに(全く)、さることなり(その通りだ)。いとよく思しのたまはせたり(よくお分かりになっていらっしゃる)」

と、いよいよ御心立たせたまひて(いよいよ三の宮と六条院との結婚を決心なさって)、まづ(先ず以て)、かの弁してぞ(かの左中弁をして)、*かつがつ案内伝へきこえさせたまひける(取り急ぎ源氏殿に趣旨を伝え申しさせなさったのです)。　*「かつがつ」は「且つ且つ」で＜次の段取りとして、取り急ぎ、子細はともかく大筋を＞みたいな言い方、らしい。

［第八段　源氏、承諾の意向を示す］

この宮の御こと(この三の宮の婿選びを)、かく思しわづらふさまは(朱雀院がこのように悩んでいらっしゃる様子は)、さきざきも*皆聞きおきたまへれば(六条殿は前々からよく聞き知りなさっていらしたので)、　*「みな」は＜ことごとく、全て、残らず、つぶさに＞だが、事情を全て知っていたというのは他家の事だから不可能で、しかし中納言が直接話を聞いたこと(一章四段)もあったくらいだから、およその朱雀院の考え方は源氏殿も分かっていた、ということで＜よく分かっていた＞のだろう。

「心苦しきことにもあなるかな(心苦しく思える事情のようですね)。さはありとも(そうは言っても)、院の御世残りすくなしとて(院の御余生が残り少ないとしても)、ここにはまた(私にしてみても)、いくばく立ちおくれたてまつるべしとてか(どれほど長く生き残れると自負申して)、その御後見の事をば受けとりきこえむ(その姫宮のお世話をお引き受け申せようか)。

げに(確かに)、次第を過たぬにて(年の順で逝くものとして)、今しばしのほども残りとまる限りあらば(兄院亡き後も今暫しの間も私が生き残るとすれば其の限りは)、おほかたにつけては(元々)、いづれの皇女たちをも(どの皇女であろうと)、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど(他人事と聞き流し申し上げる筈もないが)、またかく取り分きて聞きおきたてまつりてむをば(改めてこのように特別に兄院が御申し置かれなさった方であってみれば)、ことにこそは後見きこえめと思ふを(格別に配慮して御世話申そうと思うが)、それだにいと*不定なる世の定めなさなりや(その立場さえ頼り無いばかりの何時とも知れない私の寿命だ)」　*「ふでうなるよのさだめなさ」とは、ただの強調重複にも見えるが、「世の定め無さ」は＜世情の不安定＞ではなく＜寿命の分からなさ＞であり、「不定」が＜身分の不安定＞なのだろう。

とのたまひて(と仰って)、

「まして、*ひとつに頼まれたてまつるべき筋に(妻にと頼まれ頂くというお話しに)、*むつび馴れきこえむことは(快諾し申すことは)、いとなかなかに(それはなかなか)、うち続き世を去らむきざみ心苦しく(兄上に続いて私も遠からず世を去るという段取りが気懸かりで)、みづからのためにも浅からぬほだしになむあるべき(私自身にとっても大きな負担になることでしょう)。
*「ひとつ」は＜一緒に成ること、結婚すること＞、らしい。「頼む」は＜頼る、面倒を見て貰う＞で、「ひとつに頼む」は＜妻に迎えて欲しいと申し込む＞。　*「睦び馴る」は＜歓び親しむ、懸念無く快諾する＞。

中納言などは年若く、軽々しきやうなれど行く先遠くて(身分は低いようでも余生は長く)、人柄も(力量を見ても)、つひに朝廷の御後見ともなりぬべき生ひ先なめれば(やがては帝の相談役にもなろうという有望株ですので)、さも思し寄らむに(彼を婿にとお考え及びなさっても)、などか*こよなからむ(遜色はないだろう)。　*「こよなし」は＜比較して違いが大きい＞という語意らしく、

古語辞典には＜良い場合にも悪い場合にも使う＞とある。此処では「などか」という反語表現だから、「こよなし」は悪い意味で遣われていて＜劣ることはないだろう、遜色ないだろう＞という文意。

されど（しかし彼の者は）、いといたくまめだちて（また実に一途で）、思ふ人定まりにてぞあめれば（妻と思う人が決まっているようなので）、それに憚らせたまふにやあらむ（院は彼が他の女に気が向かないことを懸念なさったのかも知れない）」

などのたまひて（などと続けなさり）、みづからは思し離れたるさまなるを（六条殿はご自分のことにはお考えにならない様子なのを）、弁は（左中弁はこの話が）、おぼろけの御定めにもあらぬを（朱雀院の漠然としたお考えではないものを）、かくのたまへば（六条殿がこのように仰るので）、*いとほしく（困って）、口惜しくも思ひて（説明が足りないと思って）、うちうちに思し立ちにたるさまなど（小声で朱雀院がこのようにご決意されるに至る事情などを）、詳しく聞こゆれば（詳しく申し上げると）、*さすがに（そうと知って改めて納得し）、うち笑みつつ（微笑みながら）、*「いとほしく」は注に＜『集成』は「困ったことだ、残念だと思って」。『完訳』は「院に対してお気の毒にも、また残念にも思って」と訳す。＞とある。「いとほし」は『集成』に従う。が、「口惜し」は＜残念＞というよりも＜真意が伝わっていないて悔しい→説明不足＞かと思う。 *「さすがに」は＜そうはいってもやはり＞という副詞ではない。「さ（そういう事情を）す（確認して）が（改めて）に（納得した上で）」だ。

「いとかなしくしたてまつりたまふ皇女なめれば（とても可愛がって育てていらっしゃる姫宮のようなので）、あながちに*かく来し方行く先のたどりも深きなめりかしな（そこまで念入りに過去の先例や将来の見通しをたどるのも深くなったのだろうな）。 *「かく来し方行く先のたどり」は当二章四段の「昔も、かうやうなる選びには、何事も人に異なるおぼえあるに、ことよりてこそありけれ。ただひとへに、またなく持ちゐむ方ばかりを、かしこきことに思ひ定めむは、いと飽かず口惜しかるべきわざになむ」という院の考察あたりを指す、のだろう。

*ただ内裏にこそたてまつりたまはめ（ただそれなら、それこそ帝に奉りなさるべきだろう）。やむごとなきまづの人びとおはすといふことは（高貴で先に入内した妃たちがいらっしゃるということは）、よしなきことなり（宮姫の入内を控える理由にはなりません）。*それにさはるべきことにもあらず（他の妃たちがいらっしゃる後宮に入内なさることに形の上では何の問題もありません）。かならずさりとて（そうしたからといって必ずしも）、末の人疎かなるやうもなし（後から入内した人が疎遠になるものでもないのです）。 *「ただ」は「直」ないし「唯・単」で＜他ならぬそのもの、唯一＞の意で、是を単体の副詞と見るよりも、「ただ△こそ▲め（已然）」の常套句文型で＜それこそ△に▲するべきだろう＞という言い方、と読みたい。私は言い換えの補語として＜ただそれなら＞という相手の提示条件に応答する場合の接続詞を加えたが、この＜ただ（但）＞は原文の「ただ」では無い。というのも、古語辞典には「ただ」は副詞ないし形容動詞の「直、唯、単、只、徒」とあり、「但」は「ただし」という接続詞として別掲載されているからだ。実は、私自身は混同して良く分からない。 *「其れに障る」の「それ」は何か。「さはる」に敬語がないので誰かが何かを＜支障に思う、気にする＞のではなく、一般論として＜支障がある、問題がある＞という言い方のようだから、自らの前言を補足する意味で、外形論としてこの「それ」は＜他の妃がいる後宮に入内すること＞を指している、かと思う。が、分かり難い言い方だ。もしかすると、梅壺中宮が源氏殿の養女なので、その存在を気にすることもない、と院や姫に伝えようとした言い方かも知れないが、それは「よしなきことなり」で言い尽くされているように私には思える。

故院の御時に(故桐壺院の御在位中に)、大后の(弘徽殿大后が)、坊の初めの女御にて(東宮を儲けた初めの女御として)、いきまきたまひしかど(息巻いていらっしゃたが)、むげの末に参りたまへりし入道宮に(最後に参内なさった王家血筋の藤壺入道宮に)、しばしは圧されたまひにきかし(暫くは后位の座を奪われていらっしゃったのですから)。

この皇女の御母女御こそは(この姫宮の御母女御は)、*かの宮の御はらからにものしたまひけめ(あの入道宮の御妹でいらっしゃった筈)。容貌も(顔立ちも)、さしつぎには(入道宮の次には)、いとよしと言はれたまひし人なりしかば(とても美しいと言われなさった人なのだから)、いづ方につけても(御両親のどちらに似ても)、この姫宮おしなべての際にはよもおはせじを(三の宮は並の水準の器量ではよもやいらっしゃらないだろう)」　*「かの宮の御はらから」は注に＜女三の宮の母、朱雀院の藤壺の女御は先帝の四の宮藤壺入道の宮の異母妹。その母は更衣。『完訳』は「女三の宮は藤壺の姪だからというあたり、源氏の心は微妙に変化して、彼女への関心を強める」と注す。＞とある。

など(などと六条院は左中弁に)、*いぶかしくは思ひきこえたまふべし(興味深そうには思ってお話しなさったようです)。　*「いぶかし」は良く分からない事態に対して＜不審に思う＞でもあるが、原義は＜不明瞭で気懸かり＞という気分らしく、其処から＜相手や物事を知りたくて興味深く思う＞という意味にもなると古語辞典に説明されている。また、注には＜「べし」推量の助動詞、語り手の強い推量のニュアンス。＞とあるが、確かに思わせぶりな書き方だ。まるで「家政婦は見た」の語り口で、「強い推量」というよりは＜～に違いない＞くらいの思い込みで事態推移の見方を誘導する強引さだが、事情を最も近くで知る者の情報を頼るしかない、と読者は作者に翻弄されるがままだ。